第1節　職業として柔道を指導する意義

柔道塾開設以来、私がずっと自問自答してきた問題である、「職業として柔道を指導する意義」についてまず考えてみたいと思います。

▼野村豊和先生との出会い

平成2年(1990)5月、柔道塾を立ち上げるため和歌山に移り住み、そして6月にインターハイ県予選。私はその会場で遠くにおられたミュンヘン・オリンピック金メダリスト・ローザンヌ世界選手権チャンピオンの野村豊和先生(オリンピック3連覇の野村忠宏選手の叔父)に声をかけようかどうしようか迷っていました。「面識もないし、突然話しかけに行ってもなあ。何と言っても金メダリストの野村先生やし……」。しかし思い切ってご挨拶に行きました。

「あのう、初めまして。腹巻と申します。実は、このたび和歌山で柔道と勉強の両方を指導する

塾を、会社の事業として立ち上げようと……」。どんなふうに話したかは緊張していてあまり記憶にありませんが、ただ野村先生が、「ああ、それはええことやんか。ぜひ頑張ってや」と励ましてくださったことだけは鮮明に覚えています。それからのご縁で、野村先生が高校柔道部の指導をされる傍ら、少年柔道の指導をされている柔道クラブ『T・C・J』にも見学に行き、夕食をご馳走になりながらいろいろとお話ししていただいたり、紀柔館が17畳道場から貸倉庫道場へ移転した時にも道場開き式に来てくださったりしました。

和歌山県では、小学生から一般の方まででチームを組んで行う支部対抗柔道大会というのがあり、これまで私も何度か選手として和歌山市チームで出させていただきました。ある年、監督が野村先生で私は大将で出場しました。私が対戦相手に苦戦しているとニコニコ笑いながら、「ほら頑張ってや。紀柔館の今後が懸かってるでえ」というようなことを言われて、私は大慌てした記憶があります。

大学卒業後、いったんは高校教員の道をめざしながらそれを諦め、大学院に進学して今度は一般企業での柔道教育の道を模索していた私にとって、柔道塾を経営すること、つまり「職業として柔道を指導する意義」は何か。この問題がいつも大きくのしかかってきました。高校時代の恩師小出辰次郎先生が、私の同級生に「腹やんは柔道のプロになったんだ」などと自慢げに話されていたということを親友から聞いた時も、ズシっとこの〈プロ〉という言葉が私の頭の中で何度

も響きました。

私が野村先生のように、選手として現役時代にその名を世界に轟(とどろ)かせたり、一撃必殺の得意技で大活躍した柔道家なら、そんなに悩まないかもしれません。しかし、現役時代無名の、ただの投げ込み要員だった男が、柔道指導を職業として一体何ができるのか？　これまで現役時代強かった多くの先生方が、その後教員として部活動で柔道を指導されたり、警察官や柔道整復師、あるいは町の柔道愛好家としてボランティア活動で柔道クラブを運営されたりしているのに対し、「なぜお前だけが給料（会社の事業としてのスタートだったので）をもらって、職業として柔道を指導するのか？」。

いつも私の心の中には、恩師柘植俊一先生の「塾生にとって一番は何か」という価値観と行動基準、それとともに、「本当にお前には、お金をいただいて柔道を指導する値打ちがあるのか？」という自問にその場その場で自答しながら、毎日働いております。まさに序章でご紹介した「もし自分が経営者なら、今の自分を採用するだろうか？」という評価です。

▼〈プロ〉と〈アマ〉の違いとは？

あらゆる分野の世界で、〈プロ〉と〈アマ〉の違いについては、いつも話題となるテーマかと

思います。スポーツの世界では特に最近、「プロとアマの垣根が低くなった」などと言われるようですが、柔道に関してはどうでしょうか。〈プロ〉と〈アマ〉に関する問題としてはいろいろな側面があるかと思いますが、ここでは〈プロ意識〉という面にテーマを絞り、紀柔館での私の経験や考えをお話しいたします。

紀柔館開設当初は、私自身が和歌山県出身者でないということもあったのかもしれませんが、学校関係者でもなく、一般的な道場の先生(他に職業を持つ奉仕活動としての)でもなく、私の存在は非常に不可解なものとして感じられていたように思います。近隣の中学校へご挨拶に行くと、当時の校長先生はしかめっ面で「やろうとしていることはええことかもしらんけど、よそでやってほしいなあ」というお言葉。ある道場の先生からは「僕らはボランティアでやっとるからなあ」という意味深なお言葉。

また、県内でも親身(しんみ)になってくださる方々は、「大丈夫か？　教員になったほうがええんちゃうか？　やっていけんのか？」などと心配してくださったり、助言をいただいたり……。そんな中で私は考えていました。「学校でも公立学校と私立学校があり、最近は私立が公立より人気があるのはなぜか？　紀柔館と同じように生徒の授業料から先生方は給料をもらっているのに」、「スイミングスクールはなぜこんなに世の中に認められているのか？　市営プールが近くにあっても、高い月謝を払ってまで親御さんはスイミングに通わせるのはなぜか？」と。

また、こんなこともありました。紀柔館を始めて間もない頃、当時会社の寮に住んでいた私は、柔道と勉強の指導を終えて10時頃寮に戻り、夕食(いや夜食)を食べて、また仕事机を置かせてもらっていた会社の研修所に、塾生募集のチラシを作るため出かけました。

そこで、道場の案内図をパソコンで作っていると、「自分開発セミナー」の講師として研修所に泊まっておられた田中明さん(序章第2節＝19ページ参照)が事務所に来られ、「腹ちゃん、なんやその地図。そんなんでほんまに塾生が来てくれるんか？　バス停から徒歩5分てほんまに歩いてみたんか？　本気やないなあ。もう1回作り直したほうがええんちゃうか？」。夜中の零時過ぎ、「こんな時間までよう頑張ってるなあ」とお褒めの言葉でもいただけるのかと甘い気でいた私は、腹が立つやら、眠いやら……。

「お金をいただいて仕事をする」ということは、「それに見合うだけの、あるいは、その金額以上のサービスをいかに提供するか」ということ。しかし、〈言うは易く、行うは難し〉で、当時の私の仕事ぶりは〈プロ〉としては恥ずかしいものであったかもしれません(今もまだまだですが)。会社事業として紀柔館で指導をしていた頃は、仕事上夜が遅いので、上司のご配慮で、勤務時間を午後からにしていただいておりましたが、午前中は疲れてただ寝ていることが多かったように思います。しかし個人事業となってからは、何時から何時までが勤務時間でそれ以外は自由な時間などということはなく、だいたい平均して、午前8時頃から午後10時頃までが仕事時間

といったところです。

平成16年（２００４）10月８日から11日まで、和歌山県の白浜町で全柔連主催のジュニアブロック合宿が開催されました。全柔連からの主任コーチとして来られていた射手矢岬先生は、その前の８月に行われたアテネ・オリンピックにもコーチとして同行され、恐らく疲れも溜まっておられたことと思います。にもかかわらず、４日間すべてを通して近畿・東海地区から合宿に参加してくれた選手・指導者に、「日の丸の柔道衣を着た全柔連のコーチとして何ができるか」という〈プロ意識〉を持ち、非常に参考になる練習内容を工夫してくださったと強く感じられる合宿でした。もちろん、同じ４日間お茶を濁す程度の指揮であったとしても、あるいは「今回の合宿は勉強になったなあ」と参加者に喜ばれる内容であったとしても、それによって手当が付くとか付かないということはないでしょう。

では、「職業として柔道を指導する」ということの本来の意義は、どこにあるのでしょうか？

それは、先ほどのチラシ作成の話のように、いかに〈本気〉であるか、そして、どれだけそのこと（柔道）に時間を費やして打ち込めるか、ではないでしょうか。そう考えると、〈お金〉の問題ではなく、〈職種〉の問題でもなく、どれだけ〈プロ意識〉を持って日々生活を送ることができるか、ということになるかと思います。

東大名誉教授で雑誌『ニュートン』の元編集長である地球物理学者の竹内均先生が、「生活費

の中で食費の占める割合を示すエンゲル係数というのがありますが、私は24時間の中で本当に研究に費やしている時間をいかに増やすかということをいつも考えております」というようなお話をされていましたが、これこそ〈プロ意識〉かもしれません。

現役時代、柔道家として平々凡々としていた私が「職業として柔道を指導する」ためには、どれだけ柔道塾紀柔館のために〈本気の時間〉を費やすことができるかということに己を盡くすしかありません。

▼自分の腕を磨く

今回、あらためて「職業として柔道を指導するということは？」などと言ってまいりましたが、他の分野では学ぶべき方々がたくさんおられます。

私がお世話になっている近くの理髪店『カットハウスブロー』の大垣内豊店長にお願いし、そこで開かれている技術向上のための勉強会を見学させていただきました。そこには、すでに〈プロ〉として自分のお店を持っておられるオーナーの方から、いつかは自分の店を持とうと夢を持って仕事をしておられる従業員の方まで、それぞれ仕事が終わってから集まって来られます。仕事柄スタートは午後9時過ぎからで、食事もなしで毎回テーマを決めて勉強されます。毎回と